様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ９ 月 １０ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１７３２９

研究課題名（和文）大学生の心理・精神症状の測定に特化した尺度の標準化と日米比較

研究課題名（英文）Standardization of the Counseling Center Assessment of Psychological Symptoms-Japanese Version and cross-cultural comparison study

研究代表者
堀田　亮（Horita, Ryo）

岐阜大学・保健管理センター・助教

研究者番号：１０７３３０７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、Counseling Center Assessment of Psychological Symptoms－Japanese version(CCAPS－Japanese)の作成、標準化を行い、国際比較研究を通して、日本人大学生の精神的健康の程度や特徴を明らかにした。具体的には、CCAPSに関する文献レビュー、精緻な手続きに基づくCCAPSの項目翻訳、CCAPS-Japaneseの因子構造の同定、内的一貫性の検証、収束的妥当性の検証、再検査信頼性の検証、日本人学生と留学生の精神的健康度の比較を行なった。以上より、実践と研究の両面で実用可能なCCAPS-Japaneseを開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
CCAPS-Japaneseの標準化により、大学保健管理、学生支援分野での幅広い活用が期待できる。健康診断や初回面接時にスクリーニング尺度として実施することで、精神的問題を適切かつ早期に発見することが可能になろう。カウンセリングで定期的に実施すれば、変容過程のモニタリングとしても活用できる。研究では、日本人大学生の心理－精神症状の程度や特徴を明らかにし、国際比較研究に供することができる。本尺度の開発は、実践と研究の両面での貢献が期待される。本研究は、心理療法の効果検証を行う新たな評価ツールの確立と、日本人大学生の精神的健康度の程度や特徴を国内外に発信する際の科学的根拠の提出にも寄与できる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to standardize the Counseling Center Assessment of Psychological Symptoms-Japanese version (CCAPS-Japanese), and clarified the mental health state of Japanese university students through international comparative research. Specifically, we conducted a literature review of CCAPS, item translation of CCAPS based on elaborate procedures, identification of factor structure of CCAPS-Japanese, and verification of internal consistency, convergent validity, and test-retest reliability, as well as a comparative study between Japanese and international students' mental health. From the above, we developed the CCAPS-Japanese that can be used in both practice and research.

研究分野：臨床心理学

キーワード：学生相談　臨床心理学　心理アセスメント　カウンセリング　効果測定

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本邦における大学の学生相談の現場では、学生の精神的健康のスクリーニングや治療効果のモニタリングを実施するために、様々な症状評価尺度が用いられてきた。しかし、これらの尺度では、調査対象を一般成人に想定して作成しているため大学生特有の心理–精神症状やストレスを多次元的に測定できておらず、また、日本語版尺度しか存在しないため大学生のメンタルヘルスについて国際比較ができないという問題点がある。この問題は、申請者が学生相談業務を担当する立場から、学生の精神的健康度やその変容過程の評価に関心を持ち、日本で広く使用されているメンタルスクリーニングテストである K10（Furukawa et al., 2003）や University Personality Inventory (UPI：全国大学保健管理協会、1966)の有用性を検討し、見出したことである（堀田ら, 2015；Horita et al., 2015）。

上記の問題点を解消できる尺度として、申請者は Counseling Center Assessment of Psychological Symptoms (CCAPS : Locke et al., 2011)に着目した。CCAPS は、8 因子（抑うつ、全般性不安、社会不安、学業ストレス、食行動、家族ストレス、敵意、物質使用）62 項目から構成され、うち 4 項目はスクリーニング項目（自殺指標、他害指標、攻撃行動、現実感喪失）となっている。CCAPS は、大学の学生相談現場での使用を想定し、大学生の精神・心理症状、ストレスを包括的に測定でき、スクリーニングとしても治療プロセスのモニタリング、評価としても使用可能な臨床症状評価尺度を目指して開発されたものである。これまで、弁別的・収束的妥当性の検証、カットオフポイントの検討が行われており(McAleavey et al., 2012)、34 項目の短縮版(Locke et al., 2012)も作成されている。回答はデータベース化されており、すでに米国の大学生 388,000 人以上のデータが蓄積されている。

原著者である Ben Locke 博士（Pennsylvania State University）は、異文化間妥当性の検討や国際比較研究にも積極的に取り組んでおり、中国語、タイ語、スペイン語版が既に作成されているが、日本語版の作成は未着手である。申請者は、米国大学保健管理協会学術集会での交流から、2015 年に Ben Locke 博士から共同研究、日本語版作成の快諾を得た。

２．研究の目的

本研究は、Counseling Center Assessment of Psychological Symptoms−Japanese version(CCAPS−Japanese)の作成、標準化を行い、国際比較研究を通して、日本人大学生の精神的健康の程度や特徴を明らかにすることを目的とする。CCAPS は大学の学生相談での使用を想定し、大学生の心理–精神症状を包括的に測定でき、スクリーニングとしても治療プロセスのモニタリング、評価としても使用可能な臨床症状評価尺度である。本研究では以下の 3 項目を解明する。

1. CCAPS-Japanese の作成：項目翻訳、パイロットスタディの実施
2. CCAPS-Japanese の標準化：信頼性、妥当性の検証
3. CCAPS−Japanese を用いた国際比較：大学生のメンタルヘルスに関する国際比較研究

３．研究の方法

（1）CCAPS に関する文献レビュー・情報収集

CCAPS の開発過程、臨床的活用方法について、論文、Center for Collegiate Mental Health(CCMH)が発行する Annual Report、CCAPS Manual を参照し、情報収集を行った。また、CCAPS に関する量的研究のシステマティック・レビューを行った。

（2）CCAPS の項目翻訳

CCAPS Translation Policy に則り、精緻な手続きを経て CCAPS の項目翻訳を行った。具体的には、まず、研究協力者の西尾彰泰（岐阜大学、精神科指定医・専門医）と佐渡忠洋（常葉大学・臨床心理士）が別々に翻訳原案を作成した。完成した翻訳原案 2 種類について、研究代表者の堀田亮（岐阜大学、臨床心理士）と、研究協力者の山本眞由美（岐阜大学、内科医）、Aki Kawamoto (University of Michigan、clinical psychologist/researcher)が合議し、翻訳案（暫定版）を作成した。次に、翻訳案（暫定版）を逆翻訳する作業を英文校閲・翻訳サービス会社に依頼して行った。逆翻訳と CCAPS 原版の比較し、原著者の Ben Locke (Pennsylvania State University)および CCMH の研究チームの校閲を受け、一部修正を行った後、日本語版 CCAPS(CCAPS-Japanese)の項目を確定させた。調査の実施に先立ち、数人の学生に翻訳された項目について、分かりにくい表現がないか確認した。

（3）CCAPS-Japanese のパイロットスタディ

概要：日本語版 CCAPS（CCAPS-Japanese）の因子構造および内的一貫性を検証するために大規模調査を実施した。
対象者：2016 年から 2017 年に、11 大学（国立大学 3 校、私立大学 8 校）、2,758 名（男性 1,305 名、女性 1,396 名、不明 57 名、平均年齢 19.08±1.85 歳）を対象に調査を実施した。
調査内容：CCAPS-Japanese 62 項目への回答を求めた。本尺度は 0-4 点の 5 件法であった。
倫理的配慮：調査は、岐阜大学大学院医学系研究科医学研究等倫理審査の承認を経て実施した（承認番号 28-320）。以下の(4)、(5)、(6)も同様である。

（4）CCAPS-Japanese の収束的妥当性の検証
概要：2017 年に CCAPS-Japanese の収束的妥当性を検証するために調査を実施した。調査項目が多くなることによる調査協力者への負担を考慮し、調査は 4 種類作成し、それぞれ実施した。
対象者：【調査 A】大学生 329 名（男性 195 名、女性 132 名、不明 2 名、平均年齢 18.39±1.03 歳）を対象に調査を実施した。【調査 B】大学生 364 名（男性 185 名、女性 177 名、不明 2 名、平均年齢 18.30±0.96 歳）を対象に調査を実施した。【調査 C】大学生 369 名（男性 222 名、女性 137 名、不明 10 名、平均年齢 18.88±1.09 歳）を対象に調査を実施した。【調査 D】大学生 251 名（男性 138 名、女性 101 名、不明 12 名、平均年齢 20.19±0.89 歳）を対象に調査を実施した。
調査内容：【全調査共通】CCAPS-Japanese、Marlowe-Crown Social Desirability Scale Short Version (MCSD; Reynolds,1982)。【調査 A】抑うつ：Beck Depression Inventory-Ⅱ (BDI-Ⅱ; Beck et al., 1961)、食行動：Eating Attitude Test (EAT-26; Mintz & O'Halloran, 2000)、敵意：State-Trait Anger Expression Inventory-2 (STAXI-2; Spielberger, 1999)。【調査 B】社会不安：Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS; Liebowitz et al., 1987)、全般性不安：State-Trait Anxiety Inventory (STAI; Shimizu and Imae, 1981; Spielberger et al. 1970)、【調査 C】家族に関する悩み：Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales-Ⅲ (FACES Ⅲ; Olson et al., 1985)。【調査 D】学業に関する悩み：Student Adaptation to College Questionnaire (SACQ; Baker & Siryk, 1986)、物質使用：Alcohol Use Disorders Identification Test (AUDIT; Saunders, Aasland, Babor, de la Fuente, & Grant, 1993)。

（5）CCAPS-Japanese の再検査信頼性の検証
概要：2017 年に CCAPS-Japanese の 1 週間と 2 週間の再検査信頼性を検証するために調査を実施した。
対象者：【調査 A】1 週間の間隔を開けて調査を実施した大学生 184 名（男性 52 名、女性 125 名、不明 7 名、平均年齢 19.84±3.10 歳）を対象とした。【調査 B】2 週間の間隔を開けて調査を実施した大学生 106 名（男性 52 名、女性 53 名、不明 1 名、平均年齢 19.00±0.66 歳）を対象とした。
調査内容：CCAPS-Japanese への回答を求めた。

（6）日本人学生と留学生の CCAPS 得点の比較
概要：2017 年に日本人学生と留学生とで CCAPS 得点に差があるかを検証するために調査を実施した。
対象者：A 大学の全留学生に調査用紙を配布し回収を行った。回答の得られた留学生 149 名（男性 80 名、女性 69 名、平均年齢 26.64±4.64 歳）を対象者とした。回収率は 52.1%であった。本調査データでは、アジア圏の留学生が 136 名（東アジア 75 名、東南アジア 46 名、南アジア 13 名、西アジア 2 名）と最も多く、アフリカ圏が 7 名、中南米圏が 4 名、ヨーロッパ圏が２名であった。日本人学生は、同時期に調査を実施した 1,403 名（男性 596 名、女性 772 名、不明 35 名、平均年齢 19.44±1.91 歳）のデータを用いた。
調査内容：日本人学生は CCAPS-Japanese、留学生は CCAPS への回答を求めた。

４．研究成果
（1）CCAPS に関する文献レビュー
CCAPS の開発過程について、2000 年の開発開始から、2009 年の CCAPS-62 および CCAPS-34 の完成に至るまでの経過をまとめた。また、CCAPS の臨床的活用方法についてまとめた。そして、CCAPS を用いた量的研究に関する 40 本の論文のシステマティック・レビューを行った。これらの成果を論文（堀田，2018）として発表した。

（2）CCAPS の項目翻訳
「研究の方法」で示したように、精緻な手続きを経て 62 項目を翻訳した。そして、以降の研究で用いることとした。

（3）CCAPS-Japanese の因子構造の同定および信頼性の検証
確証的因子分析を行ったところ、62 項目では適合度は十分な値を得られなかった。そこで、因子負荷量の低い 7 項目を削除して再度確証的因子分析を行った結果、適合度は十分な値を示した。因子構造および因子名は原版と同様の 8 因子を採用し、55 項目版を CCAPS-Japanese として採用することとした。因子ごとにα係数を算出したところ、十分な値が得られた。

（4）CCAPS-Japanese の収束的妥当性の検証
4 つの調査を行い、相関分析によって収束的妥当性を検証したところ、すべての因子において、概ね十分な相関係数が得られた。

（5）CCAPS-Japanese の再検査信頼性の検証

相関分析によって再検査信頼性を検証したところ、1 週後、2 週後どちらの調査においても、高い相関係数が得られた。

（6）日本人学生と留学生の精神的健康度の比較

留学生と日本人学生の CCAPS 得点の差を検討するために、合計点と各因子得点について対応のない *t* 検定を行った。その結果、「家族に関する悩み」のみ留学生の方が有意に高い得点を示し、その他はすべて日本人学生の方が有意に高い得点を示した。したがって、留学生の精神的健康度は、わずかな差ではあるが、日本人学生よりも良好であることが示され、心理、精神的に留学生活に適応できている学生は多いことが示唆された。一方で、「家族に関する悩み」のみ，留学生の方が高い値を示しており、特に日本からの物理的距離が遠い留学生が抱えるストレッサーとして多い「ホームシック」の影響の他、家族を連れた留学生の場合は、子どもや配偶者の海外生活適応に関するストレスの影響が考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　11　件）

① 堀田亮、Counseling Center Assessment of Psychological Symptoms（CCAPS）の活用法と研究の動向―米国の学生相談における評価尺度の発展―、学生相談研究、査読有、39 巻、2018、143-155
② 堀田亮、学生支援に内包される発達障害学生支援、大学のメンタルヘルス、査読無、2 巻、2018、28-31
③ 山本眞由美、中川克、西尾彰泰、丸谷俊之、布施泰子、堀田亮、作田恭子、岩井栄一郎、安宅勝弘、テキサス大学オースチン校の学生サービス部門（Student Service Building）の視察報告―国際連携委員会より―、CAMPUS HEALTH、査読有、55 巻、2018、191-196
④ 堀田亮、西尾彰泰、舩越高樹、磯村有希、宮地幸雄、加納亜紀、山本眞由美、大学入学期のストレス対処能力とストレス対処行動・精神的健康度との関連についての検討、CAMPUS HEALTH、査読有、55 巻、2018、156-161
⑤ 堀田亮、西尾彰泰、山本眞由美、言語面接が困難なほど対人緊張が強い社会不安学生へ自律訓練法を適用し効果を得た一例、心理臨床学研究、査読有、35 巻、2017、468-478
⑥ キャサリン・マカティア、バリー・キーン、堀田亮(抄訳)、イギリスの大学に設置された学生相談機関のある一日の風景、学生相談研究、査読有、38 巻、2017、72-84
⑦ 堀田亮、若手カウンセラーから見る現代の学生とこれからの学生相談、第 50 回全国学生相談研究会議(別府湾シンポ)報告書、査読無、2017、10
⑧ 山本眞由美、堀田亮、高橋裕子、林多喜王、中川克、米国大学保健管理協会年次集会 ACHA2016 の参加報告、CAMPUS HEALTH、査読有、54 巻、2017、258-263
⑨ 堀田亮、西尾彰泰、磯村有希、宮地幸雄、加納亜紀、舩越高樹、山本眞由美、対処行動エゴグラムを用いた学部新入生のストレス対処行動の実態の検討：影響因との関係、CAMPUS HEALTH、査読有、54 巻、2017、161-166
⑩ 山本眞由美、堀田亮、高橋裕子、林多喜王、中川克、カリフォルニア大学デービス校の Student Health & Wellness Center と Student Disability Center の視察報告、CAMPUS HEALTH、査読有、54 巻、2017、264-270
⑪ 堀田亮、西尾彰泰、佐渡忠洋、中川克、山本眞由美、南フロリダ大学の学生支援：学生相談室・障害学生支援室の視察報告、CAMPUS HEALTH、査読有、53 巻、2016、175-180

〔学会発表〕（計　15　件）
① 堀田亮、大学におけるグレーゾーン学生対応の実態、キャリプロ実践報告会「発達障害学生支援最前線：グレーゾーン学生支援の現場から」、2019
② 堀田亮、川上 ちひろ、支援者同士の“顔が見える”関係をめざして～学内・学外連携～、大学教育改革フォーラム in 東海 2019、2019
③ 西尾彰泰、堀田亮、山本眞由美、入学時の心理スクリーニング結果と在学中の保健管理センター受診の関係、第 40 回大学メンタルヘルス学会総会、2018
④ 堀田亮、西尾彰泰、栗木由美子、今村七菜子、加納亜紀、山本眞由美、入学の精神的健康度と休学・退学・留年状況の関連、第 56 回全国大学保健管理研究集会、2018
⑤ 西尾彰泰、堀田亮、加納亜紀、栗木由美子、今村七菜子、山本眞由美、休学・退学・留年と Sense of Coherence(SOC)の関係についての分析、第 56 回全国大学保健管理研究集会、2018
⑥ 堀田亮、西尾彰泰、山本眞由美、外国人留学生と日本人学生の精神的健康度の比較ー Counseling Center Assessment of Psychological Symptoms-62(CCAPS-62)を用いた検討 ー、日本心理臨床学会第 37 回大会、2018
⑦ Horita, R., Nishio, A., Yamamoto, M. Differences in Psychological Distress between

International Students and Japanese University Students, American College Health Association Annual Meeting 2018, 2018

⑧ 堀田亮、“どの入口から入っても大丈夫”な支援体制をめざして～岐阜大学の現状と課題～、大学教育改革フォーラム in 東海 2018、2018

⑨ 堀田亮、学生支援に内包される発達障害学生支援、第 39 回全国大学メンタルヘルス学会総会、2017

⑩ 堀田亮、西尾彰泰、舩越高樹、磯村有希、宮地幸雄、加納亜紀、山本眞由美、大学入学期のストレス対処能力とストレス対処行動や精神的健康との関連についての検討、第 55 回全国大学保健管理研究集会、2017

⑪ 堀田亮、西尾彰泰、佐渡忠洋、山本眞由美、Counseling Center Assessment of Psychological Symptoms-62 日本語版 (J-CCAPS-62) の開発：大学生の心理・精神症状のアセスメント尺度作成に関するパイロットスタディ、日本心理臨床学会第 36 回大会、2017

⑫ 堀田亮、高等教育における学生支援(2)：国際化をめぐる諸課題　留学生支援をめぐる冒険、日本心理学会第 81 回大会、2017

⑬ Horita, R., Nishio, A., Yamamoto, M. Development of the Japanese Version of the Counseling Center Assessment of Psychological Symptoms: A Pilot Study, American College Health Association Annual Meeting 2017, 2017

⑭ 堀田亮、若手カウンセラーから見る現代の学生とこれからの学生相談、第 50 回全国学生相談研究会議、2017

⑮ 堀田亮、西尾彰泰、磯村有希、宮地幸雄、加納亜紀、舩越高樹、山本眞由美、学部新入生のストレス対処行動の実態とその影響因：対処行動エゴグラムを用いた検討、第 54 回全国大学保健管理研究集会、2016

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
特になし。

６．研究組織
特になし。

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。